

【国際関係学部】令和6年度 学部教学マネジメント報告書

3つのポリシーに基づいた学修者本位の教育の実現に向けて、学部教学マネジメントに関する以下の観点について各学部で計画・実行・検証し、次年度以降の改善に繋げることとする。

1. 学部における教学マネジメントの組織体制の変更点 ※計画書から変更があった場合

変更なし

2. 体系的かつ組織的な教育課程の編成・実施を支える各ツールの改善に向けた今年度の取り組みと取り組みを通して明らかになった課題

今年度の取り組み

①カリキュラムマップ

R7年度からの新カリキュラム実施に向けて、カリキュラムマップと各科目との整合性、体系性の精査に取り組んだ。

②シラバス

R7年度の学年歴変更に伴う対応措置にあわせて、すべての科目でのシラバスの見直し、特に代替措置の適切な設定や、再編した国際関係英語科目の到達目標のチェックを行った。

③その他（カリキュラムツリー、ナンバリング等）

全学研修でのカリキュラム・ツリー作成ワークショップなどを通じて、新カリキュラムについて学生にわかりやすくカリキュラムの体系性を伝える方法を検討した。

課題

- ・新カリキュラム導入に伴い再編したカリキュラムマップと各科目との整合性、体系性を継続的に精査、検証していく必要がある。
- ・カリキュラムの体系、資質・能力の科目間関係などをわかりやすく伝える工夫が必要である。

3. 学修成果・教育成果の把握・可視化の今年度の取り組みと取り組みを通して明らかになった課題

今年度の取り組み

- ・研究演習Ⅰ～Ⅳの評価基準をDPとの対応において明確にし、科目担当者間で共有した。
- ・カリキュラム委員会が主導し、各科目の到達目標を授業初回において学生に明確に伝え、評価方法との関係性を説明することを学部開講科目で共通して実施した。

課題

- ・研究演習Ⅳの必修化にむけて、DPとの対応において適切な研究演習の到達目標や評価方法を検討する必要がある。
- ・複数担当の必修科目において、客観的評価にバラツキがあるが、授業方法に課題があるのか、評価方法に課題があるのかわからない。到達目標、評価方法をさらに検討し、効果的な授業計画や成果発表の方法を精緻化する必要がある。

#### 4. 授業科目の到達目標の達成状況および学生の資質・能力の修得状況の評価と明らかになった課題

##### 評価（授業科目の到達目標の達成状況 および 学生の資質・能力の修得状況）

- ・ アセスメント科目について学習成果実感調査で検証される学修者の到達目標達成度の主観的評価は概ね高いが、3年次アセスメント科目 IIRⅡにおいては修得・実感がやや低く、クラス間にバラツキがある。
- ・ 卒業時アンケートで検証される DP 達成度（4項目の資質・能力の修得状況）の主観的評価はいずれの項目も 98%以上と非常に高い。
- ・ 卒業成果物を主たる評価対象とする研究演習Ⅳの到達目標の達成状況について、学修者による主観的評価は非常に高い一方で、科目成績評価等による客観的評価においては十分なレベルではない学生が一定程度確認された。

##### 課題

- ・ 国際関係英語科目の集大成である 3年次アセスメント科目の IIR で設定されている到達目標と、学生が習得する資質・能力との間に乖離があり、担当者間で評価にバラツキがある。
- ・ 学修者の主観的評価と科目の成績評価等の客観的評価とのズレが大きい。

##### アセスメントプランの取り組み

###### ①結果

- ・ 学生がカリキュラムを通して DP に定める学習目標に到達し、資質・能力が身についているかを、各種指標に基づいて確認できた。
- ・ R7 からの英語新カリキュラム開講にむけて、各年次科目の到達目標、評価方法を検討した。

###### ②課題

- ・ 学修者の主観的評価と科目成績評価等の客観的評価との整合性を高め、より精度の高いアセスメントとする必要がある。
- ・ 課題解決型授業となる英語新カリキュラム科目の評価方法をさらに検討し、複数の授業担当者間での統一性を維持する必要がある。

※この内容は令和6年度以降、本学における教学マネジメントの一環として、本学 HP への掲載を検討します。